

佳作

「共に繋がり共に生きる」

愛知県立豊田西高等学校2年 副島 和樹

福祉とは支え合い共に生きること。共に生きる社会を今まさに築いている福祉王国、スウェーデンを僕は訪れた。目についたことは、町でも田舎でもどこでも、高齢者や体の不自由な人の社会参加だった。彼らにハンディーがある事を除けば、その他は全く他の人と同様に社会貢献していた。これがノーマライゼーションの一部なのだろう。スーパーで一人の体の不自由な人がレジをゆっくりと打っていた。長い列に並んで待っている人達は携帯をいじくったりしてのんびりしていた。誰もイライラしていなかった。そして、一人の女の人がレジのハンディーがある男性に対して「Tack（ありがとう） マイヒーロー」と言って、ウィンクしお金を払った。彼もウィンクし返した。彼らは社会のヒーローだった。

日本はどうだろうか。障害者への虐待、高齢者の不明死など日本社会が抱える問題は数知れない。日本の福祉は、共に生きるというこの福祉の本当の意味から全く外れた道を進んでいるような気がする。どんな人でも参加できる社会を目指し、そしてそれを浸透させるため、地域単位での活動に力を入れたらどうだろうか。それぞれの地域の特徴を重んじながら、地域のボランティア活動やサービスの充実を図ろう。そして利用する側はそれらの活動を十分に理解し、積極的に利用しつつスウェーデンの様にもっと社会に出て来て欲しい。社会のヒーローになって欲しい。

帰国子女の僕は周りの空気を読む事、人と同じ事をするという日本独特の考えにとまどったことがあった。しかし、人は同じではないはずだ。人の数だけ考えや生き方がある。それを互いに尊重しながら共に生きている。

僕達は他の命と共に存在している。自己中心的な考えを改め、自分以外の他者のために生きるという考えを持ちたい。輝いている人ばかりが脚光を浴び、そうでない人は無いものとみなす様な社会では駄目だ。

僕達はどんな人ともわけへだてなく繋がるべきであり、人は人と繋がることでより強くなっていくはずだ。例えば、僕は海外では初めは言葉が理解できず、自分が繋がりたくも繋がれず自分自身本当に困った。その時に自分なりに考えた技は、得意の絵とボディーランゲージのコラボレーションだった。これは英語が通じない時や、耳の不自由な人とのコミュニケーションに大いに役立った。絵やボディーランゲージもほぼ世界共通で、僕はにわかプロにでもなったつもりで、絵に自分のサインまで入れたりして自分自身が誰よりも楽しんで交流していた。だから、いろいろな国に住んだ僕が胸を張って言えることは、五体が満足であろうと不満足であろうと、肌の色が異なっていようと、僕はどんな相手とでも繋がりあえる自信がある。

誰だって、元気に不自由なく生活していきたい。しかし、誰にでも老いはやって来るし自分を取り巻く環境も変化していくだろう。もし、自分が介護されるのなら、誰に。自分が家族を介護するのなら、どうやって。若い僕達にはあまり深く考えたことのない課題だが今一度考えてみたい。医療機関に払う十分なお金を用意するだけで良いのか、医療保険にしっかり加入しておけば良いのか、そうでは無いだろう。大切なものは一番近くにあるはずだ。家族であり、友人であり、地域であり人である。今この日本で、矢の様に流れるスピード社会の中で、またあふれ出る豊かさの中で、僕達はふと見失いそうになる。大切なものは、人との繋がり。共に繋がり、共に生きること。これを見失ってはいけない。くじけそう

な人や、悲しんでいる人を支えてあげよう。苦しんでいる人、困っている人には手を貸そう。その次の瞬間に、自分が逆の立場になるかもしれないのだから。共に支え合い共に繋がり生きていこう。一つ一つの命が一つ一つの命を支えているのだから。